



石川県指定文化財
尾形光琳「蒔絵螺鈿白楽天図碗箱」
—琳派 I より—



高橋介州「加賀象嵌孔雀香炉」
—石川の工芸 I 加賀象嵌ってなあに？より—

■ 近代の美術

前田育徳会尊經閣文庫分館

■ 石川の工芸 I 加賀象嵌ってなあに？

第5展示室(工芸)

■ 琳派 I

第2展示室(古美術)

■ 新収蔵品展 夏の優品選 I

第3・4・6展示室(絵画・彫刻)

- 主な展示作品
- 7月の企画展示室
- バスツアー報告
- キッズ夏休み体験講座募集
- 7月の行事予定
- アラカルト ただいま展示中

第2展示室 琳派 I

6月11日(木)～7月20日(月・祝) 会期中無休

前田育徳会尊經閣文庫分館 近代の美術

6月11日(木)～7月20日(月・祝) 会期中無休

前号では、現在開催中の「近代の美術」の展示概要をご案内しましたので、今号では展示中の作品二点を紹介します。

◆結城素明「澄潭」

「澄潭」とは、清く澄んだ川の淵をいい、中国では古くより詩に詠まれていきます。例えば、唐代初期の詩人沈佺期は「碧水澄潭映遠空、紫雲香駕御微風、碧水澄潭遠空に映え、紫雲香微風に駕御す」として、遠い空に映える碧く澄んだ淵を、風を自由にあやつる紫雲と対比して詠みました。

本図は、谷底に深くたたずんだ淵の光景を描いたものです。水墨による簡素な描写の上に施された樹木の色彩と、碧く広がる水面みなもが美しい作品です。

結城素明(一八七五～一九五七)は、川端玉章の門に

入り、東京美術学校卒業後、一時、洋画に転じた時期もある日本画家です。母校で後進の指導にあたりながら、西洋画的な写生を得意とし、独自の画風を切り開きました。

◆鏑木清方「梅見茶屋」

近代日本を代表する美人画家として知られる鏑木清方(一八七八～一九七二)の作品です。清方は水野年方門に入り、はじめ挿絵画家として活躍しました。後に年方に続き展覧会へ出品を始め、特に江戸情趣や明治風俗を題材とした作品で知られます。帝室技芸員、昭和二十九年(一九五四)文化勲章受章。本図は、笠を手にした旅人が、早春の茶屋で梅見する情景を美人画で表現したものです。しなやかな着物の裾に、揺れる袂。ふと振り返る女性の表情が印象的です。

前号では「琳派の祖」、本阿弥光悦を中心に琳派を論じましたが、今回は琳派という呼称の由来となった尾形光琳、そして弟の乾山に改めて注目したいと思います。光琳・乾山兄弟の曾祖母は光悦の姉にあり、また光琳の父・宗謙は京都の呉服商雁金屋の当主として能や書画をたしなみ、光悦の硯箱を所持するなど、光悦の美意識は血縁とともに光琳兄弟に大きな影響を与えたことは確かです。その光琳ですが、三十歳の時に父親から莫大な遺産を相続しましたが、生来の奔放な性格から遺産をたちまち使い果たし、挙げ句の果てに弟の乾山からも借金をします。そのため今度は乾山の生活も不安定になり、ついに光琳に借金の督促と、財産整理勧告の書状を送ります。これには光琳も相当応えたようで、四十歳頃から

本格的な作家活動を開始します。光琳は、硯箱のデザインや、屏風の制作、衣装への描画、さらに一六九九年に乾山が鳴滝泉谷に開窯した、乾山焼の絵付けなどをを行い収入を得るようになりました。光琳が真摯に制作に打ち込むようになったのは、乾山の諫言かんげんに加えて、乾山の窯にほど近い妙光寺に伝えられていた俵屋宗達の「風神雷神図」との出会いがあったからではないでしょうか。こうして光琳は宗達の画業と真摯に向き合い、生来の鋭敏な審美眼で宗達の深意を読み解き、それを親しみやすい表現へと翻案していきます。今回は、「蒔絵螺鈿野々宮図硯箱(原文)など当館が所蔵する光琳の漆芸作品五点和、「色絵雲錦手杯台」ほか乾山の陶芸作品五点和も展示しています。



尾形乾山「色絵雲錦手杯台」
江戸18世紀

結城素明「澄潭」

第3・4・6展示室 新収蔵品展 夏の優品選

6月11日(木)～7月20日(月・祝) 会期中無休

前号にひきつづき絵画・彫刻部門の新収蔵品展の紹介です。今回は各部門の作家に焦点をあて、紹介します。

日本画部門は、昨秋開催した特別陳列「いのちの花 稲元実展」の出品作から収蔵をみました。稲元実氏は家族をモデルに私世界を表現の域に高めた作家として知られる日本画家ですが、今回収蔵されたうち三点から、山を愛し牡丹の名手としても謳われた作家の側面をみるることができます。

洋画では日展、光風会で活躍する芸術院会員の藤森兼明氏の、初期より代表作にいたる九点の収蔵が注目されます。敬虔な信仰をテーマに、重厚なマチエールの女性像で知られる藤森氏。金沢美大在学中、光風会に初入選した「T君の像」は、軽妙なタッチと

属を多用し、制作には手間と時間がかかるためとても高価でした。しばしば「超絶技巧」と称されるこの時代の製品は、大金を払い得る外国人や実業家なくして成立しませんでした。職人たちは需要の縮小に苦しみます。

(2)と(3)の時代は互いに重なっています。職人たちは、名を挙げて買い手を得るために、国内の展覧会に出品します。しかし出品しても入選するとは限らず、入選しても売れることは稀でした。職人数は激減し、衰退の一途を辿ります。とどめは第二次世界大戦の勃発で、物資統制によって多くの職人が転廃業に追い込まれました。加賀象嵌の職人は、米沢弘安などの例外を除いてほとんど消滅したといえます。戦後、加賀象嵌がなんとか命脈を保ったのは、高橋介州ら作家の力によるものでした。

確かなデッサン力から、当時影響を受けた小磯良平を想起させます。その後、師高光一也の薫陶を感じさせる時代から、平成に入り信仰を主題とした作品の登場を展覧し、現在の画境に至った様子がかがえまます。

彫刻では、企画展「革新の視座」でのロープインスタレーションの記憶も新しい加賀谷武氏の作品がユニークです。氏の空間造形は、見る人の感性やエスプリで作品そのものの見方が変わるので、このほか富山を代表する彫刻家のひとり横山豊介氏の彫刻作品を始め、ここでは紹介しきれない魅力あふれる新収蔵の数々をご確認ください。

また「夏の優品選Ⅰ」と題し第3・第6展示室では絵画、彫刻の優品を展示します。この季節に相応しい展示となっています。



藤森兼明
「ピザンツへのマドリガル」

第5展示室

石川の工藝

加賀象嵌ってなあに？

6月11日(木)～7月20日(月・祝) 会期中無休

加賀象嵌ってなあに？

今回の特集では、加賀象嵌を(1)御用の時代、(2)博覧会と輸出の時代、(3)作家の時代の三つに分けて考えてみます。

(1)は十七世紀初頭から明治維新を迎えるまで。加賀藩直営の美術工芸工房である御細工所おさいくしよが、御用制作をしていた時代です。加賀象嵌を施された鏡は、武家の間で高級贈答品として人気が高かったようです。

(2)は維新後から明治中頃まで。藩の御用を失った職人たちが、海外輸出に活路を見いだし、万国博覧会等に積極的に出品を試みた時代です。銅器会社が設立され、一時は利益をあげましたが、ジャポニスムの収束や国内のデフレーションの影響もあって、ふるわなくなりまます。象嵌製品は貴金

属を多用し、制作には手間と時間がかかるためとても高価でした。しばしば「超絶技巧」と称されるこの時代の製品は、大金を払い得る外国人や実業家なくして成立しませんでした。職人たちは需要の縮小に苦しみます。

(2)と(3)の時代は互いに重なっています。職人たちは、名を挙げて買い手を得るために、国内の展覧会に出品します。しかし出品しても入選するとは限らず、入選しても売れることは稀でした。職人数は激減し、衰退の一途を辿ります。とどめは第二次世界大戦の勃発で、物資統制によって多くの職人が転廃業に追い込まれました。加賀象嵌の職人は、米沢弘安などの例外を除いてほとんど消滅したといえます。戦後、加賀象嵌がなんとか命脈を保ったのは、高橋介州ら作家の力によるものでした。



銅器会社
「金銀象嵌牡丹唐草文蠟燭台」

主な展示作品

6月11日(木)～7月20日(月・祝) 会期中無休

■前田育徳会尊經閣文庫分館

「近代の美術」

- △四季山水図襖のうち春景・夏景冬景山水図 橋本雅邦
- △昭代名画帖 橋本雅邦ほか
- △雌雄矮鶏 高村光雲

■第1展示室

- ・国実 色絵雉香炉 野々村仁清
- ・重文 色絵雌雄香炉 野々村仁清

■第2展示室(古美術)

「琳派」

- ・泉文 時絵螺鈿野々宮図硯箱 尾形光琳
- △時絵鹿に萩図硯箱 尾形光琳
- △染付錆絵杜若図茶碗 尾形乾山

■第3展示室(油彩画・彫刻)

「夏の優品選」

- △連理 脇田和
- △山羊を飼う老人 吉田三郎

■第4展示室(近現代絵画・彫刻)

「新収蔵品展」

- △武蔵野 稲元実…日本画
- △空の杜 花神の棲む 法邑利博…油彩画
- △姉妹 横山豊介…彫刻

■第5展示室(近現代工芸)

「石川の工芸 加賀象嵌つてなあに？」

- △赤絵初夏壺 北出不二雄…陶磁
- △松時絵飾箱 松田権六…漆工
- △友禅訪問着 爽風 毎田健治…染色
- △柘造八稜箱 水見晃堂…木工
- △加賀象嵌孔雀香炉 高橋介州…金工

■第6展示室(日本画・彫刻)

「夏の優品選」

- △火焰山 西山英雄…日本画
- △想 松田尚之…彫刻



高橋介州「加賀象嵌孔雀香炉」



法邑利博「空の杜—花神の棲む」



尾形光琳 泉文「時絵螺鈿野々宮図硯箱」

企画展TOPICS

没後二十年 鴨居玲展 — 踊り候え —

鴨居が亡くなったのは一九八五(昭和六〇)年九月七日の未明でした。まだ五十七歳という、画家としてはいよいよこれからという年齢で、誰もが驚きそして惜しんだものでした。でも、その直後から追悼展、三周忌展、五年、十年、十五年、二十年、二十五年と大きな回顧展がそれぞれの巡回展として開かれてきました。はいもので、もう三十年です。生前の人氣が没後も続くかといえば、多くは時間には抗えず次第に人の記憶からは薄れていくのです。そして、回顧展はコレクターや美術館の所蔵となっっている作品をチョイスして組むものですが、聞く側から言えば、これは時間と労力のかかる力業です。鴨居の場合、それが五年毎に開かれ、新たなファンを獲得していくのです。これは希と言っていいでしょう。

今回の没後三十年展は、当館にとって十年ぶりの回顧展となります。十九歳の自画像から五十七歳の絶筆、道化師まで、作品とイーゼルや絵筆、パレットなどの遺品、全九十八点の展示ですが、作品をご覧いただくだけではなく、アトリエに残されていた遺品や、富山栄美子氏がライフワークとして撮り続けた鴨居写真などで、魅力ある鴨居をより広く知っていただければとの趣旨で構成されています。

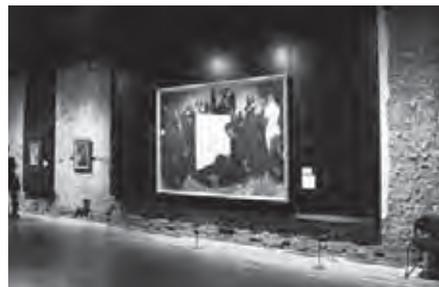
今回の鴨居展は次の四会場で開催されます。

東京ステーションギャラリー(五月三 日～七月二 日)、

北海道立函館美術館(七月二十六日～九月六日)、

当館(九月十一日～十月二十五日)、

伊丹市立美術館(十月三十一日～十二月二十三 日)



東京ステーションギャラリーで好評開催中

第7～9展示室 2015 一陽会石川支部展

7月8日(水)～13日(月) 会期中無休

■入場無料

今年、東京六本木の国立新美術館で開催される第六十一回一陽会「九月三十日(水)～十月十二日(月・祝)」に向けて、一陽会石川支部のメンバーが出品します。一陽会は「清新にして深奥なるものの創造に勉勵し、新時代の美術を推薦せんとする。尖鋭なる未完成こそ推薦し、前人未踏の新分野の確立に努力するものである」

この精神をふまえ、石川支部のメンバーの絵画三十二名、彫刻二名が日々研鑽努力し創作してきた、一年間の渾身の成果を展示いたします。美術愛好家の方々にご高覧いただけます。ご教示いただければ幸いに存じます。

■連絡先／一陽会石川支部副支部長 竹田明男

電話：〇七六一二四八―五八九八

第7展示室 第6回 石川県日本画会展

7月1日(水)～5日(日) 会期中無休

■入場無料

「日本画を志すものが、これまでの既存的概念や会派にとらわれることなく、自由で新しい発想によりそれぞれの日本画制作をすることを目的とし、会員相互の協力によってその研究・模索と石川県内での発表の機会を設け、自己の研鑽に努め、石川県の美術文化の発展に寄与する。」とし、新たな日本画の会をスタートして今年で六年目になりました。

二十代の若手からベテランまで年齢層は幅広く、モチーフも風景や静物、人物・動物や植物、具象や抽象など多岐にわたり、その視点や表現方法は個性豊かです。

ぜひ、この機会に石川県内の日本画家の意欲作をご覧ください。

■連絡先／輪島市鶴入町二―三七

石川県日本画会事務局長 宮下和司

第7～9展示室 第25回 北國水墨画展

7月17日(金)～20日(月・祝) 会期中無休

石川県内の水墨画愛好家団体を網羅した統一展です。近年愛好者の増加と作品の向上が著しい県水墨画界の結束を図るとともに、愛好者拡大を目指すねらいの展覧会で、作品は広く愛好者から公募して審査。入選、入賞作に委嘱作品も併せて展示し、水墨画の魅力を伝えるものです。

■入場料／一般・大高生五〇〇円(四〇〇円)

()内は前売料金

中学生以下無料

※当館友の会会員は、会員証提示により

前売料金

■連絡先／金沢市南町二番一号 北國新聞社事業局内

「第二十五回北國水墨画展」事務局

電話：〇七六一二六―一三五八一

第8・9展示室 第37回 伝統加賀友禅工芸展

7月3日(金)～8日(水) 会期中無休

加賀友禅技術保存会は現在、一〇名の友禅作家が会員に認定されており、加賀友禅の正統な技術保存と後継者育成のため、石川県の無形文化財の指定を受けています。その主旨を推進するため、毎年開催しているのがこの展覧会です。

第三十二回展より公募制を採用したことで、広く一般の方も出品できるようになりました。加賀友禅における新しい感性と創造的作品の数々をご覧ください。

※毎日午後一時三〇分より作品解説があります。

■入場料／四〇〇円(三〇〇円)高校生以下無料

※()内は二十名以上の団体料金

■主催／加賀友禅技術保存会

■連絡先／金沢市小將町八一八

加賀友禅会館内 伝統加賀友禅工芸展事務局

電話：〇七六一二四―五五一一

夏休み親子体験講座 参加者募集

夏休みに美術を楽しんでいただく小学生親子対象のプログラムです。親子と共に制作できる楽しいひとときを過ごしてみませんか？

低学年、高学年、学年を問わずご兄弟二名でも参加できる全学年対象の三講座をご用意いたしました。

■一・二・三年対象「絵の具大好き、みんなあつまれー」

日時／八月三日(月) 十時半～十四時半
定員／二十組(一組二名計四十名)
参加費／親子二名で五〇〇円程度

絵の具の上手な色づくりや楽しい絵の具の使い方などを体験します。絵の具を使うのがはじめての人、色作りが苦手な人、絵の具大好きな人、みんな集まれー。描いたものは絵本に仕立てます。

■全学年対象「ステンシル版画で暑中見舞いをつくらう」

日時／八月五日(水) 十時半～十四時半
定員／十五組(一組三名まで)
参加費／一名 二五〇円程度

みなさんお馴染みのトレイと同じ素材、スチレンボードを使ってお手軽な版画を楽しみます。同じ絵が何枚もつくれる楽しい版画の活動で、夏のお便り「暑中見舞い」を作ってみましょう。

■四・五・六年対象「石膏でメダルのレリーフをつくらう」

日時／八月七日(金) 十時半～十四時半
定員／二十組(一組二名計四十名)
参加費／親子二名で五〇〇円程度

彫刻作品を作る時に使う石膏は、水を混ぜると短い時間で固まる不思議な素材です。型を取ったり、削って彫刻作品を作ることできます。今回は、メダルサイズの絵が浮き出た彫刻、「レリーフ」をつくってみましょう。

■体験講座お申し込み方法(往復はがき)

【往信の宛名面】

〒九二〇一〇九六三 金沢市出羽町二一一
石川県立美術館普及課宛

【往信欄の文面】

- ・参加希望の講座名
- ・親子のご氏名
- ・(ステンシル版画で暑中見舞いをつくらう)は、参加者全員のご氏名
- ・学年
- ・住所、電話番号

【返信の宛名面】

- ・住所、ご氏名
- ・返信の文面は何も書かないでください

【応募締め切り】

七月十五日(水)必着

※定員を上回った場合は抽選となります。結果は返信はがきでお知らせいたします。

七月の行事予定

■土曜講座

午後1時30分～ 美術館講義室 聴講無料

4日(土)

金沢が生んだ美術批評家 坂井犀水(一)

西田 孝司 担当課長

11日(土)

日本画滅亡論からみた日本画

前多 武志 学芸専門員

18日(土)

駅前の銅像・モニユメント

北澤 寛 担当課長

■キッズプログラム 鑑賞講座

午後1時30分～ 二階展示室 参加無料

26日(日)

夏休み親子体験講座 アートde暑中見舞い

美術館友の会 バスツアー報告

平成27年4月26日(日)

今回のバスツアーは、「能登再発見！」と題して、石川県羽咋市と七尾市を巡りました。日蓮宗や曹洞宗などの信仰に育まれた能登の文化土壌と、そこから生まれた偉大な絵師、長谷川等伯、さらにガラスという能登の新たな魅力に触れ、あらためて能登の美のかたちを感じていただければという思いから企画しました。

午前中はまず、羽咋・妙成寺へ向かいました。お寺からの説明を聞き、重要文化財の堂宇が建ち並ぶ境内を散策。北陸では珍しい五重塔は、関西とは違った清楚な姿を海風にさらしています。次に、七尾美術館へ。嶋崎館長に解説をいただきながら「長谷川等伯展」を鑑賞しました。「楓図」(京都・智積院蔵)は、四百年の時を経てなおみずみずしい生命力に溢れています。

昼食をはさんで午後は、能登島。ガラス美術館では「オール・ヌーヴォーのガラス展」を、末吉館長と竹本学芸員の解説のもと鑑賞しました。アクセサリー制作体験を希望した方は、ひとあし早く美術館を出て工房へ。工房では、職員の方の説明を聞きながら、吹き場の見学もしました。最後に向かったのは羽咋・永光寺。

屋敷住職にはお寺の由緒や文化財のことをたのしくお話いただき、笑い声もちらほら。

ゆったりと鑑賞する時間とれなかったことを申し訳なく思っております。滞りなくツアーを終えられましたのも、みなさまのご理解とご協力のおかげと存じます。この場を借りて、御礼申し上げます。



ミュージアムレポート

毎年、百万石まつりにあわせて前田家歴代藩主の甲冑・陣羽織を展示しておりますが、五月二十四日(日)に開催されたキッズプログラムは「よろい・かぶと大研究」と題してこの甲冑等を鑑賞しました。

まず、二階の前田育徳会尊經閣文庫分館で、前田家やこの展示室について紹介しました。その後、よろい・かぶとの役割や武器の変化に伴って形も変化してきたこと、また、実際によろい・かぶとを身につけていく様子を写真で紹介し、当世具足が七つのパーツですさまなく身体を覆って守っていたこともみていきました。次に実際に展示されている甲冑・陣羽織を鑑賞し、感じたこと、見つけたこと、また、「何だろう?」「どうしてかな?」と思ったことなどをカードに書いてもらいました。参加者のみなさんからは特に質問のカードが次々と出てきましたが、質問カードを書くには作品をよく視、また、よく考えないと書けません。ご参加のみなさん方の深い鑑賞ぶり、このプログラムに積極的にご参加いただいている姿にスタッフ一同感心するばかりでした。

締めくくりは、企画展「加賀前田家 百万石の名宝」展出品の前田利家所用の黄金のよろい・かぶとの鑑賞でした。この作品は講座終了後に書いてもらった子どもたちの感想カードから、やはり一番心に残った作品だったようです。プログラム終了後、参加者のみなさんの多くは、配布した企画展示室用の子ども用パンフレットを手に、さらに作品鑑賞へと展示室に足を運んでおられました。作品鑑賞への関心の高い方々に沢山ご参加いただき、講座を終了することができました。

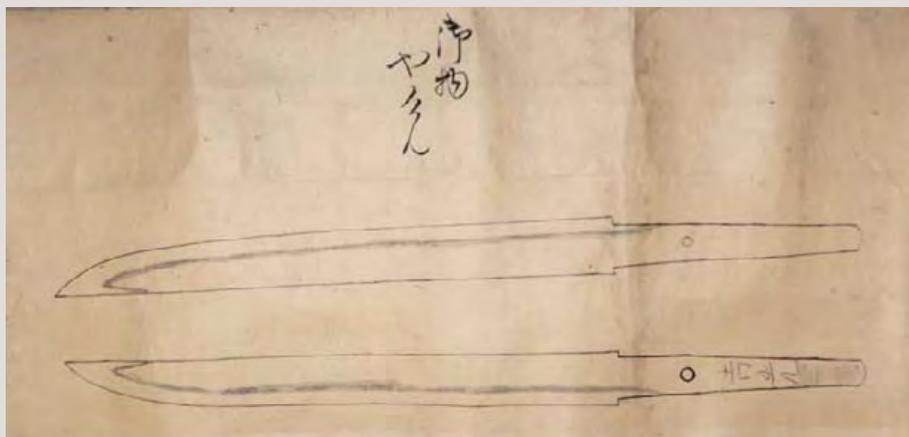


「刀絵図」(重要美術品)

文禄4年(1595) 縦39.0×横1895.8cm

本阿弥 光徳 ほんあみ こうとく

天文23年(1554)～元和5年(1619)



(部分)

あるオンラインゲームがきっかけとなって、若い女性を中心に、刀剣に対する人気が全国的に高まっています。現在第2展示室で開催中の「琳派Ⅰ」では、琳派の祖・本阿弥光悦の家業である刀剣の鑑定、研磨、浄拭に注目していただきたいとの趣旨で、本阿弥宗家の第九代・光徳の「刀絵図」(重要美術品)を展示しています。

光徳は、本阿弥家の中でも最も鑑定眼のある人物とされており、この「刀絵図」は刀剣鑑識の参考に資するため、必要な点を簡潔に要領よく図示したものです。収録されているのは主として豊臣秀吉の蔵刀で、特に太閤御物として名声の高いものが確認できる点でも第一級の史料といえることができます。奥書から文禄四年(一五九五)、秀吉の在世中に書かれたことがわかり、現在所在不明となっている刀剣の消息をたどる手掛かりとしても貴重です。

今回は巻頭から展示していますが、前号で紹介した「御物 骨喰」をはじめ、写真の「御物 葉研」など粟田口派の藤四郎吉光の名刀十二口が一度にご覧いただけます。その中には、ゲームでキャラクターとなったものも多数あり、特に現在実物を見ることができないものに関しては、往時の姿をしのぶ絶好の機会となります。

次回の展覧会

会期：
7月24日(金)～9月8日(火)

前田育徳会 尊経閣文庫分館		第2展示室	
花鳥の美		琳派Ⅱ	
第3・6展示室	第4展示室	第5展示室	第7～9展示室
夏の優品選Ⅱ	親子で楽しむ美術館 アートde暑中見舞い	石川の工芸Ⅱ	北大路魯山人

ご利用案内

コレクション展観覧料
一般 360円(290円)
大学生 290円(230円)
高校生以下 無料
※()内は団体料金
毎月第1月曜日はコレクション展示室無料の日(7月は6日)

今月の開館時間
午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間
午前10:00～午後7:00 年中無休

7月の休館日は
21日(火)～23日(木)

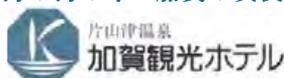
広告

片山津温泉

22種のお風呂で
おくつろぎ下さい

<http://www.kagakankoh-hotel.co.jp/>

日本海の海の幸や加賀の美食なら



〒922-0412 石川県加賀市片山津温泉 41
加賀観光ホテル予約センター 受付時間 9時～20時

Tel. 0761-74-1101

石川県立美術館だより
第381号(毎月発行)
2015年7月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel: 076(231)7580
Fax: 076(224)9550
URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>